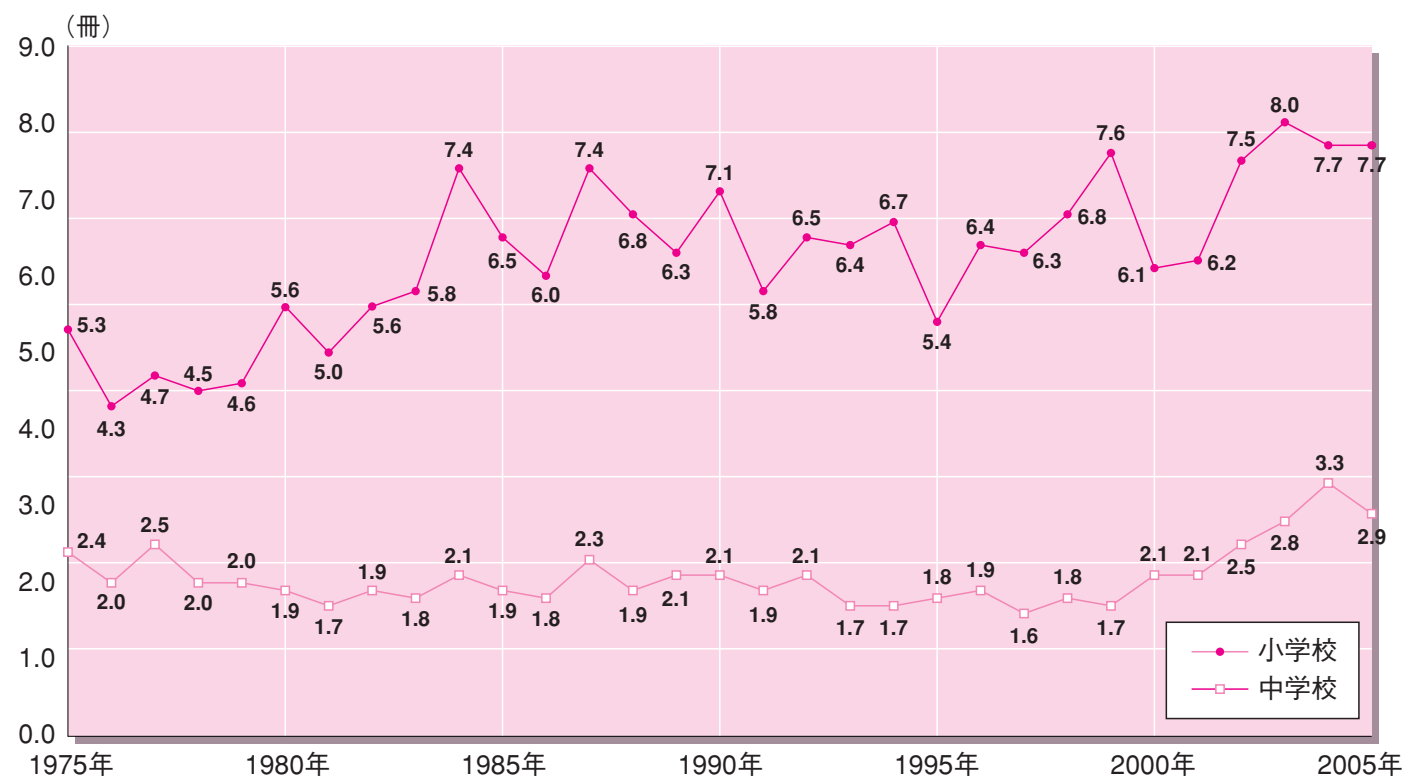
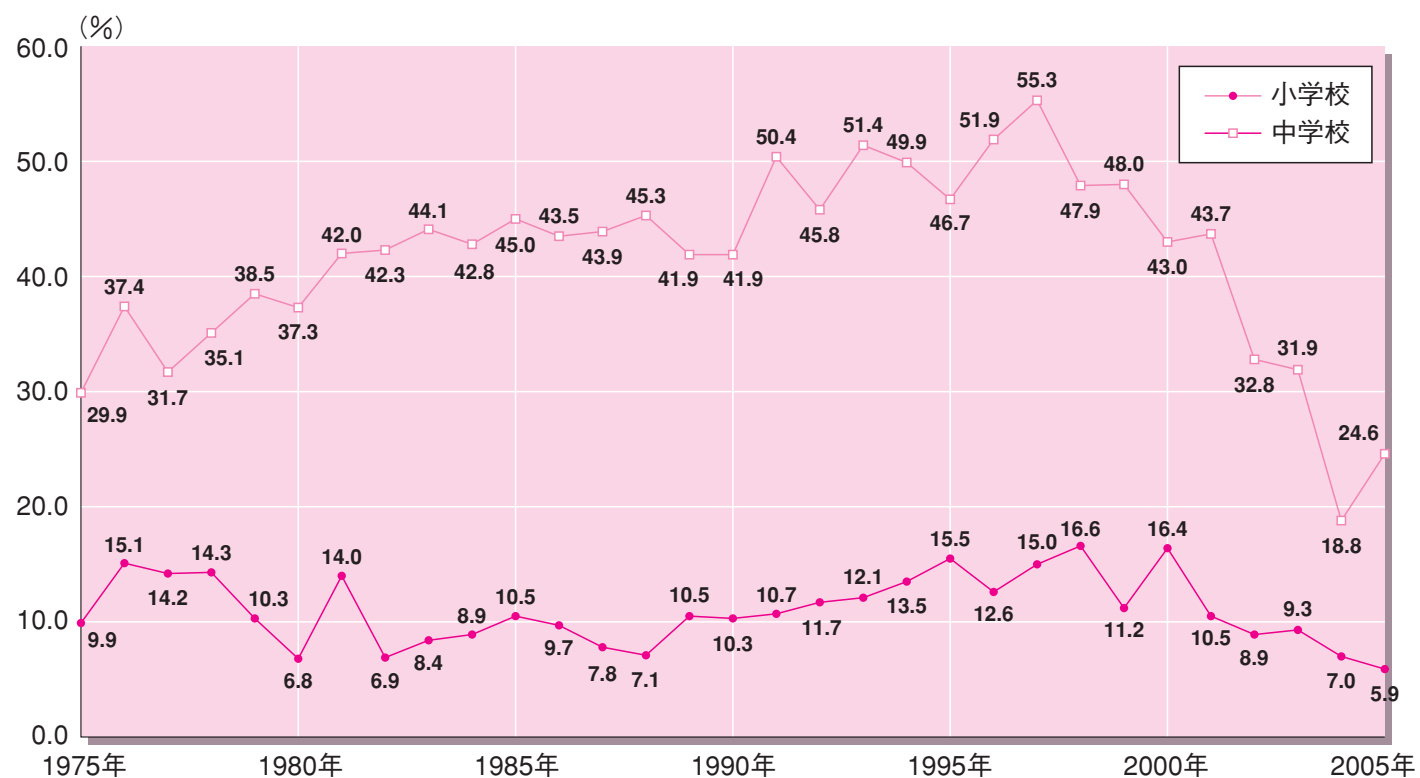


統計にみる現代

■「小・中学生の一月間の平均読書冊数」の推移



■「一月間に一冊も本を読まなかった小・中学生の割合(不読書率)」の推移



出典 毎日新聞社・全国学校図書館協議会「学校読書調査」

「学校読書調査」からみる 子どもの読書

東京都立川市立柏小学校 副校長 磯辺 延之
(社団法人 全国学校図書館協議会 研究・調査部部长)

■「学校読書調査」の概要

全国学校図書館協議会が毎日新聞社と共同で行う「学校読書調査」も、今回で52回目を迎えた。毎年の定点観測として子どもたちの読書の実態を明らかにするこの調査は、各方面から信頼され、活用されている。

内容としては、「子どもたちが、どんな本を、どれだけ読んでいるか」について継続して調査し、これに加えて、「子ども達を取り巻く読書環境」について、年度ごとに視点を変えて尋ねるようにしている。また、調査の対象は小学校4年から高校3年までの9学年であり、第52回調査のサンプル数は全体で11,396名である。

調査の時期については、1963年以降、行事等が少なく、学校が平静な姿で学習が進められていると思われる6月に固定している(ただし、本を読んだ期間については5月である)。また、調査の結果については、11月に「学校図書館」(全国学校図書館協議会発行)と「毎日新聞」紙上等で公表している。

■読書冊数の増加と不読書率の減少の理由

「小・中学生の一月間の平均読書冊数」のグラフを見ると、年によって多少の増減はあるが、全体として右上がりになっている。小学生ではこの30年間でほぼ倍増しているし、中学生はここ数年で一気に上昇している。また、「不読書率」のグラフを見ると、この10年で小・中ともに大きく減少している。これには次のような理由が考えられる。

① 読書活動推進の施策が効果を発揮してきた。

2001年12月に公布施行された「子どもの読書活動推進法」により、各自治体は「子ども読書活動推進計画」を策定した。これを受ける形で学校図書館の図書整備費として5年間で総額約650億円が地方交付税措置された。また、「子ども読書の日」が制定された。一方、「学校図書館法」の改正により、2003年4月より、12学級以上のすべての学校に司書教諭が配置された。こうした一連の動きは、学校教育における読書活動の重要性を広く認知させ、読書冊数の増加につながったと考えられる。

② 「読書の効用」が広く浸透してきた。

読書活動推進の施策が次々と繰り出される中で、読書が子どもたちの心身の成長にとって不可欠であることや、学校図書館の充実なくしては新しい時代に生きる子どもたちの学びの活動が保障できないということが改めて確認された。

特に「読書活動が語彙を増やす」「情報活用を通じた学習が学び方を身につけることにつながる」「読書を通じた疑似体験により学習内容がより確実に定着する」「読書が文化の共有につながる」「『読み聞かせ』が心の交流につながる」などの認識を生んだ。

いわゆる「朝の読書」が小・中学校に広がり、読書の時間が確保されたことも大きい。

③ 子どもの娯楽や生活形態が変わってきた。

この30年間に、子どもたちの娯楽も次々と変化してきた。場所も道具も仲間も時間も、そしてそれにかかる金額も、さらに娯楽に対する意識も。こうした状況の中で、読書は辛うじて子どもたちの生活の中で生き続けることができたと言えよう。しかし、読書の内容や形態は変わってきている。

全体としては「短編が好まれる」「難しい言葉や複雑な文が敬遠される」という傾向が見られた。その一方で「話題作に関心が集まる」「シリーズ物が読者を集める」ということもわかった。

小学生が好む本は「それいけ三人組」から「かいけつゾロリ」へと替わった。近年の中学生の読書冊数の増加には、「ハリー・ポッター」「世界の中心で、愛をさけぶ」「デルトラ・クエスト」「いま、会いにゆきます」「電車男」など、ヒット作の影響がある。

■まず大人が読書とのふれあいを増やそう

読書には様々な価値がある。特に自発的な読書は、人を育てるという意味からも大切である。その基礎作りは「読みなさい」と命令することではなく、小さい頃にたくさん語り聞かせや、読み聞かせをしてあげることであり、大人が楽しく読書をしている姿を見せることである。読書冊数の増加が一過性のものとならないよう、大人の読書を盛んにしたい。